

10.5 生明統合化第4回シンポジウムによせて

我々は、向う学内の諸階層との連帯を求めて、9月16, 21, 28日の過去3回にわたる全明統合シンポジウムをかちとってきた。体制内大学の孕む矛盾の必然現象形態としての全共斗運動は、「大学共同体」の理念という幻想をふりほき自主改革案をもって政策レベルでの收拾をはからうとする学校当局と非和解的に敵対せざるをえない。こうしたまぬがれざる関係を踏まえた上で生田地区共同会議は、9.28全明統合第3回シンポジウムにおいて現在的に停滞している明大全共斗運動の止揚・発展のために「全学評」講想を提起した。それはすぐれて新しい新しい内容を含み、それを伴う形態を模索する我々の運動の実践過程から生まれたものに他ならない、どうであるか的には必ず何か可能なかつてない逡巡している諸君は、いますぐに自分の誠意を携えて我々の権力の創出・おもいの創出を自らの実践過程において感じ抜けでゆかねばならぬのである。

当初、明大全共斗は六項目要求をあげて斗争へと突入していく。この六項目を本質的に把えるならば把えるほど学校当局にとっては容認しえぬ質を内に含んでいた。ところがこの六項目の内に含む質を理解しえぬ諸君がいるとみて、しかもさきよじとする不毛な主体性論に陥没したり、「挫折」という名の斗争放棄をしてしまった結果、やがて路線へと転落したりしていく。我々はこのように戦線から脱落していくことを一呼びかけする。過去は向うまいと。我々はいまもっと明瞭にかつ具体的に、角切りで全学評を提起している。

かっての明大斗争における自立講座が日大(文理)の "Freedom Union" へと

発展継承されたいほゆる《反大学》の講想を我々は系統的に保障されるものとして「全学評」を倉山んとするのだ。

「全学評」は、東大斗争における帝大解体(大学解体)の論理と日大斗争における《反大学》創出の論理とを統一的に継承発展しようとして京大斗争が成し遂げえなかつて破局的限界を我々の運動の内部にも存在する欠陥を追求する中から生まれた我々の血脉の真跡には他ならない。

我々は再度この社会机体の構造をどうするか、その構造をどうするか、封鎖によってストップしておいたといつて何であったのか。等々と問われればばらない。しかしながら、それが社会の限界があのままであればくるまでもある。下野斗争が社会叛乱の質を持っていたが故に社会秩序の変革を抜きにして語ることは不可能であるという視点も明らかになってくるはずである。

既に学校当局は、10月4日に川崎山にて右翼・体育会・民青の護衛のもとで全学集会を策動し、全共斗派・学生会派の学生を排除し、学校をロクアウトしようとしている。全ての学生諸君! 我々はこの3日の全明統合シンポジウムを庄臣的な学校側への攻撃をもってかちとろうではないか。それが全民族に対する熱い連帯へ証左なのだ。

10.4 全学集会を断固として粉砕させよ!

院生共斗会議・助手共斗会議